

## 創刊の辞

本誌は多様な問題設定、関心・方法から周王朝を主に前後の時代の課題に取り組む研究、教育情報等を収録する定期刊行物として創刊するものである。本誌のタイトルにある「両周」とは西周・東周をあわせたもので、周王朝というのと、さほど違いはないが、郭沫若『両周金文辞大系図録攷釈』からとっている。本誌刊行の主たるメンバーが張政烺批注本にもとづき『両周金文辞大系』の翻訳に10年以上あたっており、その機縁を重視して、勉強会の名を「両周金文研究会」と呼び、刊行物の名称も「両周金文研究会会報」と名づけた。

本誌刊行の経緯をここにまとめれば、本会創設の佐々木研太氏と下田は『両周金文辞大系』考釈部分の翻訳の前に、『龍崗秦簡』の翻訳をすすめ、「龍崗秦簡訳注」前編・後編、「龍崗六号秦墓木牘訳注」として、3回に分けて『中国出土資料研究』第14～16号（2010～2012年）に掲載していただいた。龍崗秦簡から両周金文辞大系に切り替わったのは2012年1月頃とみられるが、佐々木氏と下田のささやかな勉強会に、2016年より山本堯氏が加わった。その後、現在にいたるまで、『両周金文辞大系』考釈の西周部分（批注本では上冊）の翻訳を続けている。その成果の一部は、東京学芸大学の公開講座や泉屋博古館のイベント等において発表してきた。下田誠・佐々木研太『西周金文に親しみ、活用する：平成29年度東京学芸大学公開講座記録』（東京学芸大学、2018年3月）等は本誌に先行する取り組みである。

本誌刊行については、『古史春秋』や『史料批判研究』、近年では『出土文献と秦楚文化』等の先行事例を参考にした。とりわけ『漢字学研究』を刊行する立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の活動からは大きな刺激を受けている。両周金文研究会は、事務局組織をもつ団体ではなく、本誌も手作り感のある刊行物となるが、先秦史研究、中国出土資料研究の活性化に貢献できればと考えている。

時代の趨勢をふまえ、ピアレビューにより、一定の水準を確保するが、さまざまな問い、関心・方法から周代前後の課題に取り組むものを収録する。このたび編集委員会を組織するにあたり、両周金文研究会のメンバーのほか、思想史方面を強化するため、小倉聖氏に参画を依頼した。今後も質の向上のため、関係の研究者にご依頼できればと考えている。このように水準の確保には留意するが、本誌については、斯界に知られる学会誌とも多少すみ分けながら、比較的自由に自分たちの考えを発表する場としたい。両周金文研究会は、会費を取らない活動であり、本誌の刊行も手弁当によるものである。さまざまな制約はあるとはいえ、まず一步、踏み出すことにした。定期刊行物の発行とは、不慣れな作業でもあり、失敗もするかもしれない。しかし、軌道にのれば、当初目標としてきた『周秦研究』に“格上げ”したいと考えている。

文責：下田 誠